法学部・広瀬崇子教授の授業・講演会

中部電力顧問の伊藤隆彦氏
「原発のあり方―多様な視点から考えよう」

東京電力福島原子力発電所の事故により、原発の安全性、エネルギーとしての原発の是非が議論されている。

元中部電力副社長の伊藤隆彦氏（現顧問）を迎え、原子力発電（原発）についての講演会が7月15日、神田キャンパスで開かれた。

広瀬崇子法学部教授の授業の一環。伊藤氏と広瀬教授は2007年から10年まで内閣府原子力委員会委員を務めた。

▲ 会場からの質問も活発だった

▲ 講演する伊藤隆彦氏

当日伊藤氏は、170人が出席した授業の後、広瀬教授のプレゼミにも参加して討論。学生たちが原発を考える絶好の機会となった。

伊藤氏は「福島原発の事故は、全力で地域のみなさんの信頼回復に努めなくてはならない」「今回の事故を認識し、今後、原発をどのようにしていくべきか、次世代を担う皆さんによく考えてほしい。意見をぜひ聞きたい」と切り出した。

原発は少ない燃料で安定した多くのエネルギーを得られる功率の良さを持つ半面、炉心の崩壊熱冷却など複雑な制御が必要で、その制御が効かなくなると大きな事故を引き起こし、周辺環境に甚大な影響を与える――。

伊藤氏は、そういった原発の二面性をよく理解・認識する必要があるとし、福島原発で何が起きたのかを、地震の影響を受けながら事故を免れた女川原発などと比較して説明した。

また、諸外国の「脱原発」の動きについても触れた。

さらに、地震大国・日本における原子力発電所の安全管理のポイントをあげ、津波など自然災害想定について根本的な見直しが早急に必要であると述べた。

講演の後、学生たちから質問が多数寄せられ、その中には原発に頼らないエネルギーの可能性を指摘するものもあった。

伊藤氏は「原発問題は推進側、反対側のこう着した議論にとどまっており、市民の積極的な参加につながっていない。原発の特性、技術のみならず歴史、哲学、世界観など幅広い視点からそのあり方や必要性を考えるべきだ」と語った。

刑法学者による百学百話
日高学長が『読書と人生』出版

日高義博学長・理事長が『読書と人生　刑法学者による百学百話』を上梓した。

本書は、講演録の「読書と人生」（Ⅰ）、随想を集めた「読書随想」（Ⅱ）、「滞独随想」（Ⅲ）、「坐忘居随想」（Ⅳ）の4部から成る。日高学長の幼少時から現在までの書物との出合い、読書方法などを自己対話ふうに叙述しながら、専門分野である刑法学の根底に広がる知識の地下水脈を省察している。

刑法の専門著書とは趣を変え、「明晰（めいせき）な思考の中に、直観的に引き出されたものや、情から発露するものなどを盛り込むよう心掛けた」という。著者にとっての読書の魅力はなにかを多方面から探る書である。

本書の売上金は、被災学生を支援し、専修大学・石巻専修大学の復興に寄与したいという願いを込め、本学の「教育研究振興協力資金」に充てられる。

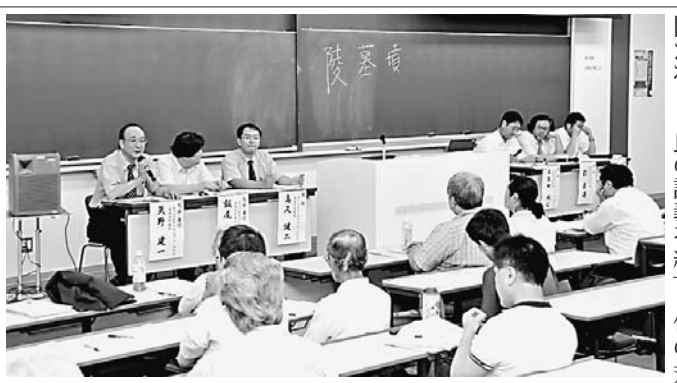
SI Libretto（エスアイ・リブレット）『読書と人生』は本体700円＋税。発行は専修大学出版局。

東アジア世界史研究センター公開講座
墓制から見た東アジアの交流

文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業の「古代東アジア世界史と留学生」の2011年度公開講座「墓制から見た東アジアの交流」（社会知性開発研究センター／東アジア世界史研究センター主催）が7月9日、生田キャンパスで開かれ、3氏の講義を約250人が聴講した。

荒木敏夫同研究センター代表（文学部教授）が、「プロジェクトがスタートして5年目を迎えた。東アジアという視点にこだわった研究は確実に進展している」と述べた。

続いて、高久健二文学部教授が「楽浪郡と三韓・倭の対外交流」と題し、楽浪漢（前漢の武帝が朝鮮半島に設けた4つの郡〝漢四郡〟の1つ）の古墳文化の変遷について概観し、三韓の墳墓や倭の墳墓から出土する副葬品などから東アジアの交流関係を考察した。


▲ 講演者全員で会場からの質問に答えた（左端は司会・進行役の矢野教授）

土生田純之文学部教授は「墓制から見た三国朝鮮と倭」を講演。墓制の観点から朝鮮三国と倭の関係が密接であった3世紀から6世紀中葉に焦点をあて、朝鮮半島から日本に渡った木槨（もっかく）墓（板で囲んだ四角い部屋の中に棺を納める墓）や竪穴式石室の系譜、また、日本から朝鮮半島に渡った前方後円墳や横穴式石室の系譜を辿（たど）り、両者の密接な相互交流の実態に迫った。

最後に、陝西省考古研究院隋唐考古研究部長で西安における発掘調査の指揮官を務める劉呆運氏が「長安城郊外の唐代墓と東アジア」と題する講演を行い、本学非常勤講師の三宅俊彦氏が通訳を務めた。長安城の南郊外地区でこれまで発見された唐代の墓は2千基を超える。

なかでも重要とされる少陵原、鳳栖原、高陽原の3つの大型家族墓地の発掘によりもたらされた考古学的発見の数々が紹介された。

講演後は、飯尾秀幸文学部教授と矢野建一文学部教授も加わり、聴講者から寄せられた質問に講師陣が答えるかたちで討論が行われた。漢式遺物の意味の変容、『日本書紀』に記される任那日本府の存在、墓地と風水との関係など多岐にわたり、白熱した論戦が繰り広げられた。

▲ 多くの聴講者が来場した

広渡清吾法学部教授が日本学術会議新会長に就任

広渡清吾法学部教授が、日本学術会議の新会長に就任した。

7月11日に開催された第160回日本学術会議総会において選出されたもので、人文・社会科学系の会長は初めて。

広渡新会長は、「大震災による被災地域の一日も早い復旧と復興のために、科学・技術に関することまでの実績と課題、可能性と限界、また科学・技術のはらむリスクを真摯（しんし）に検討し、被災地域の復興、再生はもとより、日本社会、さらには世界の持続的な発展に向けて学術の果たすべき役割を、一層強く追求しなければならないと考えております」と抱負を語っている。

広渡　清吾（ひろわたり・せいご）＝京都大学法学部卒業。東京大学副学長などを経て、2009年、専修大学法学部教授。主な担当は、ヨーロッパ大陸法。専門は、基礎法学（ドイツ法、比較法社会論）。

「KS（川崎・専修）ソーシャル・ビジネス・アカデミー」受講生募集

川崎市と専修大学が共同で運営し、ソーシャル・ビジネスの人材を育てる「KS（川崎・専修）ソーシャル・ビジネス・アカデミー」（川崎市・専修大学共同市民ビジネス人材育成事業、専修大学大学院経済学研究科特別教育プログラム）が10月からの開講に向け、受講生を募集する。

◇期間：2011年10月10日（月）～12年3月12日（月）
◇募集人員：受講生30人、科目等履修生5人
◇学費：受講生5万円。科目等履修生（1科目）1万円
◇教室：専修大学サテライトキャンパス（向ヶ丘遊園北口駅前アトラスタワー2階）
◇申し込み期間：9月8日（木）～9月16日（金）［必着］
◇選考：書類審査（一次）・面接（二次）。
◇募集説明会▽8月23日（火）19：00川崎市産業振興会館▽同29日（月）19：00麻生区役所▽同31日（水）19：00中原区役所▽9月2日（金）19：00高津区役所▽9月4日（日）15：00専修大学サテライトキャンパス▽同9日（金）19：00専修大学サテライトキャンパス

※問い合わせ＝専修大学大学院事務課　KSソーシャル・ビジネス・アカデミー係☎044（922）9384

情報通信学会緊急シンポ「災害と情報通信」
山田健太専大准教授と湊信吾石巻専大教授が報告

▲ 本学の山田准教授（左端）と湊石巻専修大学教授（左から２人目）

第28回情報通信学会大会が7月2、3の両日、生田キャンパスで開催され、2日に開かれた緊急シンポジウム「災害と情報通信」では、本学の山田健太文学部准教授と石巻専修大学情報教育研究センター長の湊信吾教授らがパネリストとして参加した。

山田准教授は東日本大震災時のメディア報道について解説、新聞など伝統的なメディアとソーシャルメディアなど新興メディアの災害時の社会的役割について分析した。

湊教授は、被災地・石巻専修大学のインフラ、学内システムの復旧状況や、生存者の安否確認についての発信方法などを報告した。

訃報

青木　弘明氏（あおき・ひろあき）名誉教授・元商学部教授

7月18日、85歳で死去。1965年から在職。1997年定年退職。主な担当は商品学各論。

安藤　賢一氏（あんどう・けんいち）元法学部教授

7月23日、93歳で死去。1967年から在職。1989年定年退職。主な担当は英語。

専修人の新しい本

「古　墳」

土生田　純之著

奈良や大阪には全長200㍍を超える巨大古墳が34基も残っている。古代人はなぜこうした巨大な墳墓をつくったのか。

本書は、その構造や葬送儀礼の変遷などから、古墳をつくった集団を探り、在地社会の政治構造を検討している。さらに渡来人とのかかわりや国家形成など、古墳築造の背景を社会的観点から考察している。

単なる墓ではなく、「その時代々々に生きた人々の証」としての古墳の姿を鮮やかに描き出した。

（吉川弘文館〈歴史文化ライブラリー〉・本体1700円＋税）

著者（はぶた・よしゆき）文学部教授。主な担当は「考古学概論」。